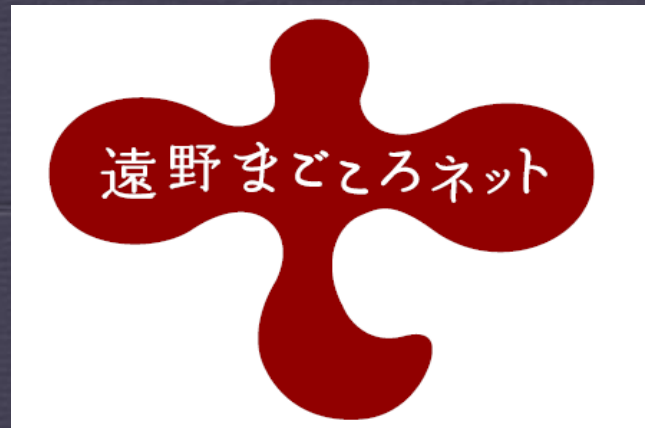


災害前の備えのできる強靱な社会は

垣根のない柔軟な社会
市民社会のパートナーシップ

によって形成される



tonomagokoronet

かきねを超える

問題は、垣根つまり境界である。

垣根は様々なところに存在し、また新たに築かれる。

これらの垣根がより強固になるのは、それぞれその思惑が各個人の目的を左右するときである。

大きくは「国境」日常では「行政と市民、企業、NPO等」だ。

東日本大震災のような未曾有の災害が発生した時でさえも、小さな垣根は存在した。この垣根の抑制は簡単ではなかった。

今、災害支援は、緊急支援、人道支援、更には復興支援へと変化している。その過程において、垣根はどんどん構築されている、新たな垣根であったり、再構築もあったりする。

行政と市民、NPO・NGOなどの間にもしばし取り除かれていたように見える垣根が構築されつつある。しかも強固に。

これは明らかに、自己顕示欲の現れでは無いだろうか。

自分の領域を守る。または活動が、自己のための活動になり、

主たる目的が変わってしまう。上下関係を明確にしたい等と
考えだすところにその原因がある。

我々はここで、世界、地域、個人がそれぞれに自ら閉鎖して
いかないように考えなければならない。出来るだけオープン
な関係を造り、維持する事が、起こりうる困難な状況への柔
軟な対応に繋がるはずだ。

人はそれぞれに、現実の傍らで理想とする人間関係や暮らし、
社会や国のイメージがあるはずだ。これらはおそらく現実
にある問題を是正したイメージではないだろうか。そしてそれ
が本来の希望のイメージだ。そのイメージは多くの人々が共
有し重なり合うイメージである。そのイメージに向かう努力
こそが、我々に最も重要な事であり、その結果、市民社会と
のパートナーシップが生まれる。それこそが行政であり、そ
こから柔軟で強靱な社会が形成されるのではないだろうか。

遠野まごころネットの組織感

1、組織のイメージ

- ① 状況を理解した上で状況にあった組織をつくる。
 - ・ 従って状況把握と同時並行でスピードを要する。
- ② 状況変化に応じて柔軟に変化対応できる組織とする。
 - ・ 必要に応じて、縦組織化・並列化・放射化となれる。
- ③ 各々自己の欲求が達成できない時、組織に責任転嫁しない。
 - ・ 組織に使われるのではなく、組織を使え。
 - ・ 使えない者が、言い訳として組織を批判する。

2、行動できる組織と行動していない組織（ネットワーク）を共に活用する。

- ① どちらも情報の窓口だ。どう活かすかはそれぞれが考える。
- ② それぞれが足を引っ張らない、障壁とならない努力が必要。

3、検証が必要な理由

- ① 良い検証 → 良いビジョン → 良い制度
 - ・ 良い検証をしなければ、良いビジョンが出来ない。
 - ・ 良いビジョンが出来なければ、良い制度はできない。
- ② 良い制度は、使える制度、使う気になる制度

4、災害等の備えができた強靱な社会

- ① 良い検証→良いビジョン→良い制度を備える社会
- ② 人や地域の結びつきが大切で、防災に限らず協働の喜びを見いだせる社会
- ③ 行政に民間感覚、民間に行政感覚を相互に持ち合わせ、尊重し合える社会。サポート関係が成立する社会 = 備え

上記の為に、垣根のない、柔軟な社会 = 強靱さ

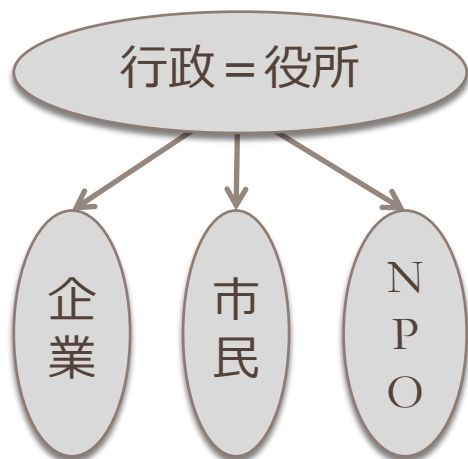
5、市民社会とのパートナーシップ

- ① 現在は、行政と市民社会の一部のパートナーシップが存在しているが、多くは縦の関係であり、その関係が行政となるものではない。役所 = 行政
- ② 4者が柔軟に協調できる体制そのものが、行政であり、並列な関係となる。

役所 + 市民 + 企業 + NPO = 行政 = 市民社会とのパートナーシップ

① 現在の社会

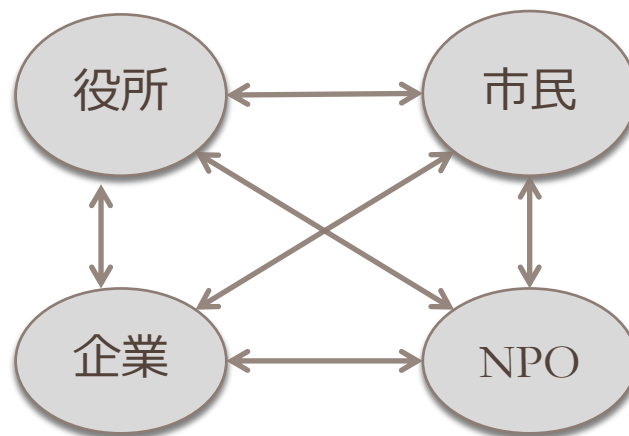
役所が行政そのもので
他は行政ではない



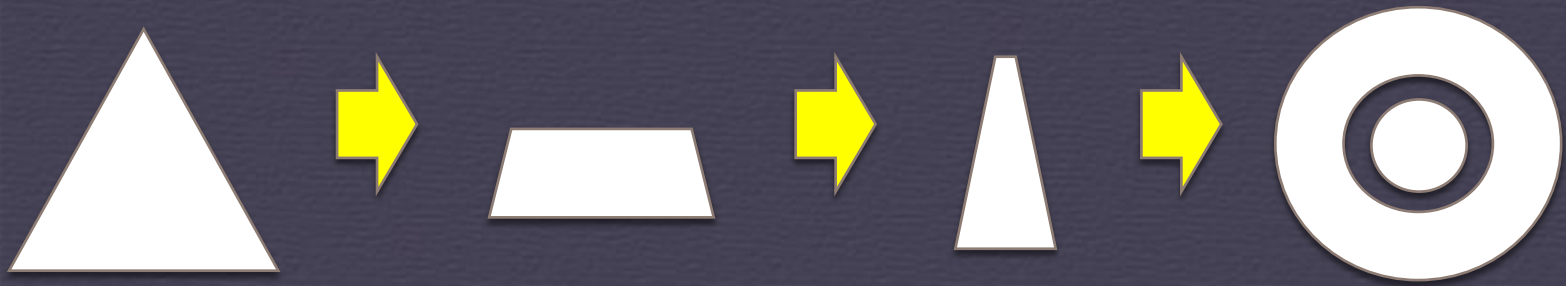
積極的に協調
体制へ向う
努力が重要

② 柔軟な社会と行政

この協調を行政と考える
役所 ≠ 行政

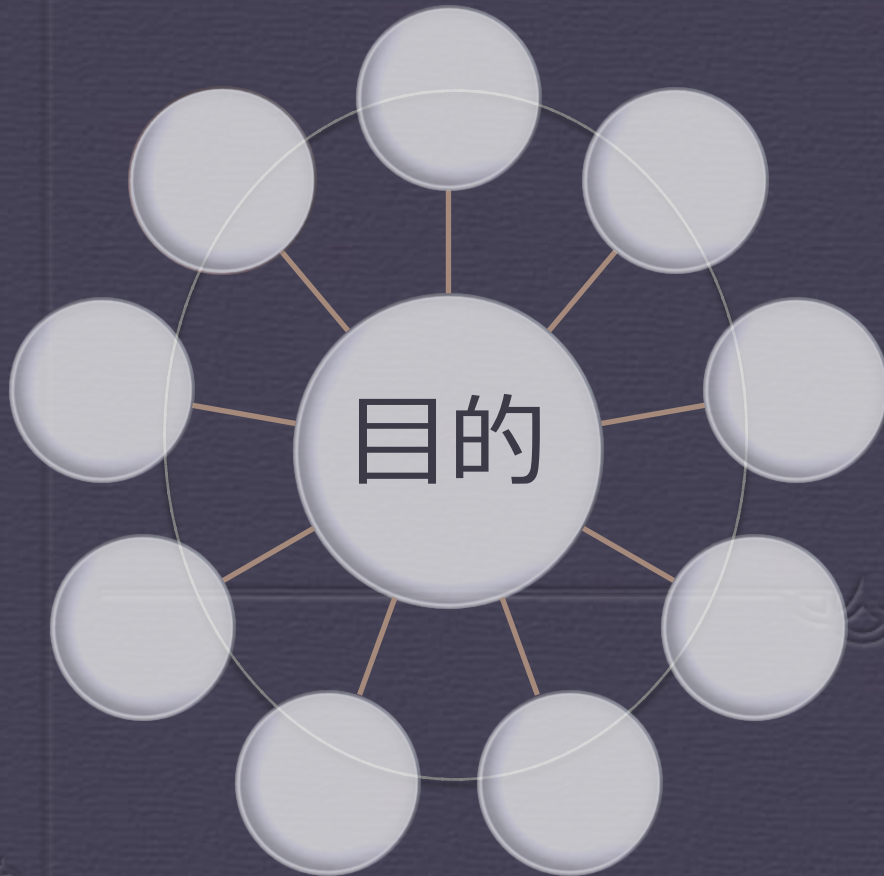


遠野まごころネット 組織図 1



状況に合わせて、フォーメーションを変化できる柔軟な組織

遠野まごころネット 組織図 2



- ・立位置で手を強くつなぐ、目的に対して手をつなぐ意識。
- ・前後左右上下、どこへでも移動できるポジションをとる。
- ・プロジェクト別、エリア別の体制がどちらでもとれること。
- ・見る目、聞く耳、言える口が必要不可欠。